tovo トヴォ PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 4

No.038 - 100号まで、残り62家族、62ヶ月

NO.038

あおもりの100家族。わたしたちのこれから。

20150511

tovo plus～あおもりの100家族、わたしたちのこれから。[season 4] No.038

今号（39家族目）のご家族▸
岡田 実穂さん・宇佐美 翔子さん

撮影場所▸
Osora ni Niji wo Kake Mashita（青森市）

●2011年３月11日のこと、憶えていますか？
▸実穂さん「大阪で大学のゼミでの講演の仕事があって、その帰りの車中でした。ゆ～らゆ～らと目眩みたいな感じでゆっくり揺れて、なんか疲れてるのかなぁと思いました。ちょっと近所のNPO法人の事務所に寄ったんですね。その事務所のTVで初めて大変なことになってると知りました。私は性暴力被害者の支援をしているので、家に帰ってすぐに、避難先で性暴力被害が起きないように１０項目にわたっての要望書をまとめて国や行政に即日提出しました。1995年の阪神・淡路大震災の時に避難所での性暴力被害があったんですよね。そういうことが東北で再び起きないようにと願い、その日から東北の支援を続けました。」
▸翔子さん「私は東京で電話相談の仕事に行く途中の地下鉄丸ノ内線の中でした。電車がゆりかごみたいに揺れたんですよ。すぐに電車が止まったんですけど、電車の中で、このままここで埋まったらどうしようとかいろいろ考えましたね。同じ車両に乗っている人たちが、各々パニックにならないように自制している空気感は印象に残っています。しばらくして電車が最寄りの駅まで移動して停車しました。そこから地上に出て、職場に電話すると、家に戻ってもいいということになったので、３～４駅を歩いて家に戻りました。途中、青森の母親のことが気になったんですが、携帯電話が繋がらなくて、並んで公衆電話から電話したんですけど、母親は停電で状況が全くつかめていない状態で、その時点で知り得た情報を説明しました。ビルのガラスが落ちてきたら危ないと思って、どこ歩いたらいいんだろう？なんて考えながら歩いてましたね。みんなが静かに移動してたのが印象的でしたね。」

●その夜はどうしていました？
▸実穂さん「ちょうど支援系の仕事をしていたので、これから起きるであろういろんなことが頭を駆け巡って、さぁ準備だ！っていう感じで、スタートになった夜ですね。」
▸翔子さん「私たちは全国にネットワークがありますから、被災地の誰々さんに電話して状況を聞いてみようとかありました。と同時に、私たち支援をする側も個人として困難な状況というのを各々抱えていて、それが平行線で続いていくような感じでしたね。」

●心境や生活の変化はありましたか？
▸実穂さん「３１１以前は何の疑いもなく信じていたものが、本当はそうじゃないんだなと気がつ

きました。だいぶ変わったなぁ。」
▶翔子さん「とにかく自分で考えなきゃいけないんだということを突きつけられた出来事でした。行政にセクシャルマイノリティについての要望書を出したんですけど、この災害時にセクシャルティの問題は２の次だとか、余計なことをするなっていうことも言われたりしましたね。」
▶実穂さん「そう、いろいろ言われたりもしたけど、結果的にはセクシャルマイノリティの報告書がたくさん出たし、東北で１番変わったのは、セクシャルマイノリティに関しての団体が倍増したこと。隠れていたら、自分たちは何にもなくなってしまうと気がついたんだと思う。避難場所が別になるとか、仮設住宅に住めないとか、ホルモン治療や、HIVのポジティブの人たちも薬がストップしてしまったり、今までやってきたことが全くできなくなってしまう。しかも、それを言えないという状況だったんですね。みんな各々が本名を知らなかったりして、安否の確認も難しかった。様々な不都合、しかも生死に関わることがあって、その中で繋がらないとダメだということになってきたんだと思います。」
▶翔子さん「日頃どういう繋がりを持つか。互助というかさ、少なくとも何人かの人には自分の本名であるとか、普段いる場所であるとか、そういうのを告げていないとマズイなということになってきたんだと思う。有事に私たちは何をすべきかというのを危機感を持って考え、行動をするきっかけになったと思います。」
▶実穂さん「去年(2014年)、私たちは、青森市役所に婚姻届を出して、もちろん、断られたんですけど、それも、自然な流れだったと思います。」
▶翔子さん「生死に関わる状況になると、例えば病院とかで、必ず『家族は？』というのが出てくるんですよね。大変な時に『家族とは？』がどのように認知されているかで、いろいろなことが変わってくると思いますね。」

●10年後のイメージは？
▶実穂さん「子どもができてるかもしれないね。小学校入学くらいとか？」
▶翔子さん「今でも十分家族だけど、子どもを持つという選択をしているかもしれないですね。血縁ではないけれども、家族と呼べる人たちと繋がりをもって、そこで老後を迎える準備が始められてたらイイな。」
▶実穂さん「あと、私たちでこの駅前銀座をサンフランシスコのカストロ地区みたいにしたいよね、日本のカストロ（笑）。tovoさんのショップとかあったり（笑）。」

【取材後記】2012年秋、僕は陸奥新報さんの取材を受け、その時はまだ７号しか出ていなかったこのフリーペーパー「tovo plus」について話した。紙面には、「‥『どんな家族にも平等に震災はあった。』と、ひとり親や同性愛者などの家庭にも目を向けるつもりだ。‥」と記載された。僕のその思いは３８号になっても変わらない。あの日以降、僕たちに突きつけられたのは「家族とは？」だと思うし、それは、所謂「家族」には収まりきらないくらい多種多様であった。そして、その問いは、そのまま片親、或いは両親を失った子どもたちの「家族」にもつながっていくことだと考えている。 (今号No.038の撮影とインタビュー担当者：小山田和正)

【寄付総額】2011年6月～2015年4月30日まで「¥3,133,241」を、あしなが育英会「あしなが東日

本大震災遺児支援募金」へ寄付することができました。ご支援に深く感謝致します。

【定期購読のご協力を!】1年間の定期購読を承ります。1,800円(送料・寄付含)／1年間(12号)です。このフリーペーパーは定期購読の皆様のご支援で発行されております。ご支援の程、宜しくお願い致します。ご希望の方は、ウェブショップ（http://shop.tovo2011.com）よりお申し込みください。